

歴史探訪

クラブ! 其の154

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局3635
FAX 22局3811

田原の馬

今年の干支は「午^{うま}」。かつて馬は、牛とともに、農耕、荷物の運搬、移動に使われていました。今でいえば、自動車、トラック、トラクターなどと同じように、普段の生活から生産活動まで幅広く活躍していました。昭和30年代くらいまでは、市内の農家の門長屋でも牛が飼われ、家畜との関わりを知る光景が見られましたが、馬を見た記憶はありません。かつて、伊川津貝塚から見つかった馬の骨から、日本では縄文時代の

馬の存在が推定されていましたが、現在では、馬は古墳時代に伝わり飼育が盛んになったとされています。伝わった当時、馬は軍事（騎馬）、権威の象徴のためのものでした。馬の存在がわかる市内で最も古い資料は、田原町の神明社古墳から見つかった馬の轡^{くわ}や飾り道具（6世紀後半）です。衣笠小学校の敷地にある市内最大級の栄巖古墳^{えいがん}では、鉄製の馬形^{うまがた}が見つかっており、馬は軍勢力、権力を見せつけるため特別な動物だったことを証明します。骨は、サンテパルクたはら（野田町）にある山崎遺跡から木製の鐙^{あぶみ}や鞍^{くら}とともに見つかっています。伊川津貝塚や吉胡貝塚でも鎌倉時代くらいの地層から、田原城でも戦国時代の井戸周辺から、馬の頭蓋骨^{ずがいこつ}が見つかっています。古墳時代以降も、市内には確実に馬がいたことがわかります。



▲【上】伊川津貝塚で見つかった馬の骨
【下】栄巖古墳で見つかった鉄製馬形

江戸時代になってからは、馬は主に荷役や移動、農耕用に使われています。騎馬として使う馬の飼育は大変難しく、特別な技術が必要なため多額の費用が必要でした。田原藩でも、姫島では軍事用の馬の飼育をしていたことが記録されていますが、優秀な馬が飼育できず継続を断念しました。『渥美町史』によると江戸時代から明治の初めまでの統計で、3割ほどの家で牛馬を飼育し、うち馬が6割程度を占めていたとされます。馬の比率が高いのは、馬の飼育が盛んだった東日本に近い状況です。また、馬から牛へ比重が変わったのは『田原町史』によると

明治25年ごろだといえます。馬は古代より、祈りの場に捧げられる

場合が多く、例えば古代では井戸周辺や水辺で多く見つかり、飢饉^{ききん}や干ばつが治まるようにと、願いを込めて供犠^{ともぎ}されました。山崎遺跡や田原城で見つかった馬はそのような願いのために捧げられたのでしょう。今日でも、馬形や絵馬などに代えられ、神社に奉納されています。馬は、生活を支えるだけでなく、人々の願いをかなえる力を持っているとされる、かけがえのない動物でした。現在では、馬は動物園や乗馬場などでしか見ることはできません。家畜として身近だったものから、日々の生活に縁遠い存在となっています。（増山）

今月の「表紙」

▼昨年活躍したプロ野球選手の小川泰弘選手（赤羽根町出身）が帰郷し、地域貢献のため野球教室に参加。子ども達の夢を叶えた小川選手のように、プロ野球選手を夢見る子どもたちの目は、とても輝いていました。田原市の将来を担う子どもたちには、野球に限らず、さまざまな分野において活躍してくれることを期待したいですね。（I）

【表紙の写真】野球教室（赤羽根文化広場）